
俺とメイドの禁断の恋

覇王丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とメイドの禁断の恋

【Nコード】

N8091A

【作者名】

霸王丸

【あらすじ】

あることでメイドを派遣してもらう神崎竜也だったがいざメイドが来るといやになっていきひどい事をしたりしたが、あることで急にメイドのえりなへの態度が段々変わっていく話です！

(前書き)

この話はフィクションです。

俺の名前は神崎 竜也（カンザキ タツヤ）24歳

ごく普通の会社員だ。 現在は一人暮らしをしている。

そこに金はいらないけど、家に住ませてくれるだけでいいと言うメイドの宣伝が家に来た。

「じゃあ、お願いします。」

別に悪い話ではなさそうだ。

俺自体も仕事で忙しくて、家事もろくにできていないからな。

そして、噂のメイドが到着したようだ。

「ご主人様、これから末長くヨロシクお願いします。私はメイドのえりなです。」

「まあ、とりあえず上がんなよ。」

いざ、メイドをたのんでみるとかなりうっとおしいな。

「ここがお前の部屋だ。好きに使ってくれて構わん。」

「では、早速家の掃除をします。」

と言ったあとテキパキと掃除をしている。

いや、まじでかなりいやだ。だってプライベートがなくなるじゃね

えか。

なんとかして追い出したいな。

何か計画をたてねば・・・。

そして、夕食の時間になった。

当然のようにご飯がきちんと並べられていた。

「ご主人様、どうぞお召し上がりください！」

と笑顔で言っている。

「俺、外でご飯たべてくるわ。」

と冷たい言葉を吐き捨てた。

「わかりました・・・。いってらしゃいませ！ご主人様。」

えりなの顔が少し悲しそうだった。だが仕方ない。

そんな事を考えながら飯くって自宅に帰った。

「お帰りなさいませ！ご主人様。」

ドアを開けた瞬間にその声が飛び込んできた。

「ご主人様、お風呂に入られますか？」

もう、たのむ辞めてくれ。俺もう我慢の限界だ！

「ご主人様どうなされました？」

俺の中で何かが爆発した。

「うるさいんだよ！！目障りなんだよ！！！」

と怒鳴り声をあげて。バシィ！！と張り手をしてしまった。

えりなは泣いていた。

俺はすぐに自分の部屋に行った。

そして、こんな生活が五日間続いた。

翌朝会社に呼び出された。俺はすぐに準備をして会社に行こうとした。

「いってらしゃいませ・・・ご主人様・・・」

とかなり暗い感じで言っていた。

まあ、それも当然だ。だってヒドイ事をいっぱいしたもんなあ。

などと考えているうちに会社に到着すると、急いで部長室に向かった。

「失礼します。」

とノックをして部屋に入った。

「神崎君、きみはろくに資料をまとめられないのか！きみみたいなヤツはただウザイだけだ！」

「はい・・・すみません次は必ず成功させます。」

「次失敗したらキミは辞めてもらうからな！」

仕事の時間が終わって車で自宅に向かっていた。

さっき部長に言われたあの、ウザイって言う言葉たしかえりなにも言ってしまったんだな。

いざ言われてみるとかなりキツイな。

それより、誰か俺を慰めてく欲しい。
自宅に着いた。

「お帰りなさいませ。ご主・・・！」

俺はえりなに抱きついていていた。

「ご主人様どうなされました？」

「ゴメンなえりな。俺ひどい事言ったり、俺の事が憎いのならここから出ていってもいいよ。もちろんお金は渡すから・・・。」

「確かにやられたときはちょっとショックでしたけどでも全然気にしてませんよ。」

「えりな・・・。」

「もう、ご主人様泣かないで下さい。よしよし。」

と言って俺の頭をなでなでしている。
今のえりなは天使のように見えた。

「ご主人様、少しお休みになって下さい。」

「ああ、少し休ませてもらう。」

えりなは俺の部屋まで付き添ってくれた。
俺がベットに寝転がると。

「ご主人様、私が付いていますから。」

と天使のような笑顔で言った。

俺も安心して深い眠りに入った。

「起きてください！ご主人様！」

の声で俺は目覚めた。

「おはよう。えりな。」

「おはようございます。で、でもこのままだと遅刻しますよ。」

「えっ！や・やべえ！早く準備しないと。」

「ご主人様、朝ご飯どうします？」

「食べていくよ。やべっ早くしなきゃな。」

えっ…ちょっと待った！もしかしてえりなの料理食べるのはじめてだ。

何なんだこの気持ち…俺昨日の夜から変だ…。
準備ができ下へと降りた。

もう、朝ご飯が並べられていた。

俺は椅子に座り

「いただきます。」

俺は初めてえりなの料理を食べてこう言った。

「うん。めちゃくちゃおいしい。」

「ありがとうございます。ご主人様！」

笑顔…いや嬉しそうな顔だった。

急いで俺は玄関に向かった。

「いつてらしゃいませ。ご主人様。」

「じゃあいつてくる。すぐ戻るから。」

俺もしかしてえりなの事が好きなのか？

そんな事を考えているうちに会社に到着したようだ。

俺は黙々と資料を作りだした。

長い時間がかかったがようやくできた。

早速、部長室に向かった。部長に資料を渡した。

「これは…いけるぞ！よくやった！成功すればキミにも分け前はあげよう。」

「ありがとうございます。」

俺は喜び勇んで自宅に向かった。

自宅に着くと。

「お帰りなさいませ。ご主人様！」

俺はえりなに抱きついた。

「やったぞ！えりな。資料作り成功したぞ。」

「おめでとうございます。」

「じゃあ、風呂にはいつてくる。」

俺は風呂から出てそのままベットに寝転がった。
翌朝：珍しく早くに目が覚めた。

えりなが朝ご飯の準備をしている。

「おはよう。えりな。」

「あっ！おはようございます。早いですね。」

今日は早く会社に行かなければならない。

えりなの朝ご飯を食べて。玄関に向かった。

「いってらしゃいませ！ご主人様！」

「えりな：少しだけ帰りが遅くなるだから：待っていてくれ。」

といい俺は車に乗った。

部長室に入ると。

「おお。神崎君！はいこれがきみの取り分だ1500万円だ！」

「ありがとうございます。」

「神崎君。キミには課長職用意しよう。」

「ハイ！ありがとうございます。」

会社をあとにし少し寄り道をして自宅に帰った。

「おかえりなさいませ。ご主人様！」

「えりな、お前にプレゼントがある。」

「プレゼント？」

「ああ、これだ！」

俺はえりなに箱を渡した。

「これは…ネックレスですか？あと…これは香水？」

「その香水はライオンハートだよ。あとそのネックレスは俺とえりなの名前がほってある。」

俺はもうえりなの事が本気で好きになっている。

俺はえりなに抱きついた。

「もう、俺たちを引き離せない。」

といい俺はえりなにキスをした。えりなも俺の体に手を回してきている。

晩ご飯の時間を終え。そろそろ寝る時間になった。

「えりな。今日は一緒に寝よう。」

「ハイ。ご主人様。」

ベットに二人で入り見つめ合っていた。

「えりな。愛している。」

「ご主人様…私も好きです。」

といいおわるとキスをして俺はえりなの服を脱がして行ってブラを取り、乳をもんだ。

「えりな…やわらかい。」

次は乳首を舐めると。

「あっ…気持ちいい…。」

俺はえりなのアソコに指をつつこんでだしてひいてを繰り返した。

「あっ……気……気持ちいい……。」

俺も我慢できなくなり……俺の息子をえりなのアソコに挿入した。

「あっ……初めてなのに……かなり気持ちいい……です」

俺は腰を振りまくった。そっそろそろイキそうだ。

「あっ……イクウ……。」

と同時に白濁色の液をえりなの腹に出した。

「はぁはぁ、えりな結婚しよう。」

「ハアハア……ハイ。ご主人様。」

翌朝……俺はえりなの服を買いに行くために出掛けた。
色々な服を買って家に戻った。

「えりな。服を買ってきたよ。」

「えっ服ですか？」

「うん。まず俺の両親に会う時にきるスーツをセットで4着、
ターシャツを5枚、私服をたくさん買ったよ。」

次の日……両親に会う約束をしていたので準備をしていた。

えりなは服合わせに困っていた。

「どうした？えりな。」

「ご主人様、私あんまりこうゆうのきないから。ちょっと。」

「仕方ないなあー元ファッションデザイナーの俺が合わせてやるよ。それにもうご主人様じゃないよ。竜也って呼びな。」

服を合わせ終わり。両親に会いに行った。

両親の家に着いた。

「来たよ。父さん！母さん！」

母さんが来てこう言った。

「あら、いらっしゃい！さあ、上がって。」

奥に進み椅子に座った。椅子には既に両親が座っていた。

早速俺は本題に入った。

「俺、えりなと結婚したいんだ！」

すると父さんがこう言った。

「こんな素晴らしい方となら父さんは大賛成だ。」

すると母さんが。

「えりなさんはこの事についてどう思っていますか？」

「私は竜也との結婚を本当にしたいです。」

父さんはこう言った。

「結婚を認めよう！さあ、紙を貸しなさい。」

とうとう結婚することになった。

この後幸せな結婚生活をしたことは皆さんの想像にまかせます。

(後書き)

読者の皆さんどうでしたか？初めての作品なんでかなり書くのがむずかったです。評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8091a/>

俺とメイドの禁断の恋

2010年11月26日16時02分発行